東アジアのガンカモ類研究界隈で、今、何が起こっているのか（牛山克己）

ガン，カモ，ハクチョウ．よく考えたら不思議な生きものです．

恐竜の時代から地球上を生き抜き，多様な進化を遂げながら世界中の水辺に分布しています．生態的多様性に富み，人との関りも深く，分類や進化，行動，野生生物管理などのモデル生物として，古くはダーウィンからディヴィッド・ラック，コンラッド・ローレンツなどの研究者を魅了し，様々な学問分野の発展に寄与しました．ガンカモ類研究は実は裾野が広く，可能性に満ちている…そんな風に言えるのかもしれません．

ガンカモ類研究は欧米で開花しましたが，狩猟鳥として絶大な人気があり，文学や芸術においても親しまれているなど，社会的背景が研究の発展を後押しした面も大きいのではないかと思います．では，日本国内におけるガンカモ類研究はどうでしょうか？JOGA 第二回集会（2000）において嶋田さんが「日本国内におけるガンカモ類の資源利用研究」と題して 1900 年初頭から 2000 年にかけての研究史を 4 つのステージにわけてレビューしてくれています．その 100 年の間でガンカモ類は受難の時代を経験し，保全の対象となりました．国際協力を可能とする枠組みができ，全国規模のモニタリングの体制も整っています．国内のガンカモ類研究は，そうした時代にあわせて前向きに進んできたのかと思います．だけどなんでしょう…．研究素材として有用で，研究を進める社会的背景としてもめぐまれている方なのに，研究事例は比較的少なく，鳥学会では少数派で，若手研究者の参入も少ない．そんなイメージもつきまといます．

一方で東アジアを見渡すと，近年ガンカモ類研究の界隈で大きな変革が起きています．渡り追跡の躍進です．その中心は中国と韓国で，特に中国は破竹の勢いとなっています．その後押しとなっているのは，高病原性鳥インフルエンザ対策のための豊潤な研究予算と，渡り研究にイノベーションを起こした GPS 発信機の開発が両国で進んだことがあるでしょう．また，中国では国をあげて湿地保全の取り組みが進められていることや，国際誌への掲載が研究者の重要責務となったことなどが複合的に作用し，ガンカモ類研究の底上げにつながっているのかもしれません．

しかし，そんな東アジアのガンカモ類研究も，まだ欧米とのギャップは存在します．保全管理に直結する個体群動態に関する研究や分析はほとんどなく，分類や進化に関する研究もほとんどありません．農業や水産業との共生，気候変動や風力発電などの脅威，市民科学とモニタリングに関するテーマもまだまだ伸びしろがあるでしょう．

日本のガンカモ類研究は，東アジアのビッグウェーブに乗り，欧米とのギャップを埋め，さらには世界のガンカモ類研究を率先していくことは可能でしょうか？そのひとつのカギとなるのは，ガンカモ類の捕獲です．研究者がより手軽にガンカモを手にとることができるようになれば，研究対象としての可能性も大きく広がるでしょう．また，身近で目立つガンカモ類の特性を活かして，市民科学を拡充することもガンカモ類研究の可能性を広げる上で重要です．それらに関わる「ガンカモ類作業部会国内科学技術委員会」と「渡り鳥 CEPA ワーキンググループ」が両輪となり，ガンカモ類研究に新たなウェーブを起こすことができるのか... ご注目ください．